

## 『正法眼藏』における修と証

栗 谷 良 道

道元の修証観については、筆者が敢えて論じるまでもなく、既に多くの研究業績が報告されており、その特徴についても伝統的な定説として論じられている。

たとえば、鏡島元隆氏は、論文「本証妙修の思想的背景」(宗学研究第七号、昭和四十年五月)において、

道元禅師の修証観は周知のように本証妙修といわれる。本証妙修とは、修行の出発点を凡夫の位におかないで、仏の位におくものであり、その意味でそれは本覚門的修証観といえることができる。

と述べており、道元の修証観が「本証妙修」であることを確認している。また、山内舜雄氏は、著書『道元禅と天台本覚法門』(昭和六十年六月、大蔵出版刊)の序論において、

「本証妙修」こそは道元禅の真髓をしめす基本的な思想であり、きわめて高次元の思想内容を有するものである。(一三頁)

と述べており、道元において「本証妙修」が基本的な思想で

あることを前提として出発している。このように、道元の修証観は「本証妙修」として伝統的に論じられてきている。

しかし、袴谷憲昭氏が論文「道元理解の決定的視点」(宗学研究第二十八号、昭和六十一年三月)において、

一般に道元禅もしくは曹洞宗の宗旨として人口に膾炙している「本証妙修」などというスローガンは、禅師理解の決め手になるどころか、むしろ安易な理解を助長させることにしかかっていないということを指摘せんとするものである。

と述べて「本証妙修」を道元理解の決め手にはならないと主張したことにより、道元の修証観とされてきた「本証妙修」をめぐる論争が展開されたのである。そのような状況において、鏡島元隆氏は前の論文「本証妙修の思想的背景」を補強するべく、新たに「本証妙修覚え書」(駒沢大学仏教学部論集第十八号、昭和六十二年十月)を発表し、

私は、先学が「本証妙修」という語をもって道元禅を特質づけたことをまちがいはと考えないし、また私がこの語を襲用したこと

を誤りとも思わない。それ故に、今後においても、この語を用いて道元禪の特質を示すつもりである。

と述べて自らの立場を鮮明にしている。袴谷氏が「本証妙修」を道元禪の特質とすることに対する批判を展開したことに対し、その批判を斥け、道元禪の特質は飽くまでも「本証妙修」に求めることを強く主張しているのである。

この一連の論争において展開されている問題は、道元禪の特質を「本証妙修」とすることの是非についてであると言いうことがきる。しかし、筆者には、道元の修証観とされている「本証妙修」が一連の論争において如何なる意味として用いられているのか明確に受け止めることができない。道元の修証観が、なぜ「本証妙修」と定義づけられているのか明確な理解を得ることができないのである。

本論文では、道元禪の特質を「本証妙修」とすることの是非を論じるための前の段階として、「本証妙修」が如何なる修証観として考えられているかを問題としてみたい。

## 二

道元の修証観とされている「本証妙修」が道元の用いた語でないことは周知の通りである。すなわち、道元の修証観を「本証妙修」の語で示す場合、その語が如何なる修証観を意味しているかということが重要な問題となる。この問題につ

『正法眼蔵』における修と証（粟 谷）

いて、鏡島氏は、論文「本証妙修覚え書」の中で、

私にとっては、「本証妙修」といっても、「証上の修」を言い換えただけのものである。従って、道元禪師においては、「本証」と「妙修」は離ればなれに用いられていて、「本証妙修」という一連の語として用いられていないというようなことは、単なる形式論に過ぎない。内容上からみれば、「本証妙修」は「証上の修」であるからして、それは道元禪師の言葉として、同じ比重をもつ言葉として私は理解する。

と述べており、道元が特に「弁道話」で述べている「証上の修」をこそ「本証妙修」の意味と解釈している。この解釈が鏡島氏の独自のものであるか、あるいは伝統的に培われてきたものであるか、それは筆者の知るところではない。いずれにせよ、鏡島氏は「証上の修」を道元禪の特質と考えていることが理解されるのである。ここで問題になることは、鏡島氏が「本証妙修」と解釈している「証上の修」が果して道元禪の特質と言うことができるかどうかということである。

この「本証妙修」という語は、周知の通り、道元の著書『正法眼蔵』『弁道話』の巻において「本証」及び「妙修」と用いられていることに起因している。すなわち、同巻に、

すでに証をはなれぬ修あり、われらさいはひに一分の妙修を単伝せる、初心の弁道すなはち一分の本証を無為の地にうるなり。

……中略……妙修を放下すれば本証手の中にみたり、本証を出身

『正法眼蔵』における修と証（粟谷）

すれば妙修通身におこなはる。（道元禪師全集上七三七頁）

とあり、ここに説かれている「本証」と「妙修」とを結び付けて「本証妙修」として用いられているものである。更に、

仏法には、修証これ一平等なり。いまも証上の修なるゆゑに、初心の弁道すなはち本証の全体なり。……中略……すでに修の証なれば、証にきはなく、証の修なれば、修にはじめなし。ここをもて、釈迦如来・迦葉尊者、ともに証上の修に受用せられ、達磨大師・大鑑高祖、おなじく証上の修に引転せらる。（同前）

とあり、鏡島氏が指摘している「証上の修」という語が三回に互って用いられている。この「証上の修」は「修証一等」という立場に基づいて説かれており、初心の弁道修行も本証の全体に含まれていることが主張されている。このことより、道元の主張する「証上の修」とは修が証に含まれていることを意味していると言うことができる。このような言い方は、また、同「弁道話」の巻において、

いまをしる功夫弁道は、証上に万法をあらしめ、出路に一如を行ずるなり。（道元禪師全集上七二九頁）

とある箇所にも見いだすことができる。この箇所では、修行は証上に万法をあらしめることを述べており、証上の弁道修行を示していると言うことができる。

このように、確かに道元は「証上の修」を主張しているのであるが、具体的に「証上の修」という語を見いだすことが

二〇六

できるのは前に示した箇所のみであり、その他の箇所においては残念ながら「証上の修」という用語を見いだすことができない。そればかりではなく、「証上の修」が説かれている「弁道話」において、

この法は、人人の分上にゆたかにそなはれりといへども、いまだ修せざるにはあらはれず、証せざるにはうるることなし。（道元禪師全集上七二九頁）

とも説かれており、修と証の特性が示されている。すなわち、この法は、修によって現れ、証によって得ることができると示されているのである。このような修と証は必ずしも「修証一等」ないし「証上の修」という範疇で解釈することができないということを示唆している。

ところで、修と証の関係は、道元の著作の中でも、その性格上、殊に「弁道話」において論じられることが多い。この「修証一等」ないし「証上の修」についても、その例外ではない。しかし、道元の修証観については、著書『正法眼蔵』の多くの箇所に言及されており、その著作を通じて厳密に検討しておかなければならない。その意味では、道元禪の特質とされている「証上の修」という修証観が「弁道話」においてしか論じられていないのであれば、果して「証上の修」は道元禪の特質を示す修証観として決定的に位置づけることができるのであろうか。

### 三

道元は、「弁道話」ばかりではなく、『正法眼蔵』の多くの箇所において修証論を展開している。道元禅の特質とされている「証上の修」に関連して言及するならば、『正法眼蔵』

「発無上心」の巻には、

釈迦牟尼仏言、明星出現時、我与大地有情、同時成道。しかあれば、発心・修行・菩提・涅槃は、同時の発心・修行・菩提・涅槃なるべし。……中略……一発菩提心を百千万発するなり。修証もまたかくのごとし。しかあるに、発心は一発にしてさらに発心せず、修行は無量なり、証果は一証なりとのみきくは、仏法をきくにあらず、仏法をしるるにあらず、仏法にあふにあらず。(道元 禅師全集上五二八頁)

とあり、発心・修行・菩提・涅槃が同時であると述べている箇所を指摘することができる。更に、この箇所では証果が一証のみではないことを特に強調している。また、『正法眼蔵』「行持」上の巻には、

仏祖の大道、かならず無上の行持あり、道環して断絶せず。発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あららず、行持道環なり。

(道元禅師全集上二二二頁)

とあり、発心・修行・菩提・涅槃に間隙のないことを述べている箇所を指摘することができる。この箇所では、更に、こ

『正法眼蔵』における修と証(粟谷)

れら四者に間隙のないことを特に行持道環としている。

ここに示した箇所では、特に発心・修行・菩提・涅槃を取り挙げ、これら四者は同時であり、これら四者の間には間隙のないことを主張している。すなわち、修と証が同時であり、両者の間には間隙のないことを主張していると言うことができるのである。しかし、ここでの主張は修と証が同時であることと間隙のないことだけであり、この主張から修が証上に含まれているという意味を汲み取ることはいできない。

修と証の間に間隙がないという主張は、また、『正法眼蔵』「仏経」の巻においても見いだすことができる。すなわち、

西天東地の仏祖、かならず或従知識、或従経巻の正当怎麼時、おのおの発意・修行・証果かつて間隙あらざるものなり。発意も経巻・知識により、修行も経巻・知識による、証果も経巻・知識に

一親なり。(道元禅師全集上四〇五頁)

とあり、発意・修行・証果の関係が示されている。すなわち、発意・修行・証果の三者には間隙がないということを主張している。しかし、ここでも修と証の間には間隙がないという主張だけであり、両者の同時性という点を看取することができたとしても、証上の修であるかどうかという点については何らの言及もなされていない。

道元の修証観を「証上の修」という観点で考えるならば、証が前にあり、修が後にくると考えなければならないことに

なる。しかし、順序としては、発心↓修行↓菩提↓涅槃、あるいは発意↓修行↓証果という順序を崩していない。すなわち、修と証の順序としては修↓証という順序を考えていたことになる。ただ、修と証が同時であると主張しているとしても、順序については証を修の前として位置づけていると言うことはできない。

ここで、更に考えておかねばならないことは、果して道元が修と証の同時性を強調していると言い切ることができるのかどうかという問題である。確かに、前に示した箇所では、修と証が同時であることを主張していたのであるが、次に示す用例には必ずしも修と証が同時であるという関係を規定する具体的な言葉を見いだすことができない。すなわち、『正法眼蔵』「諸悪莫作」の巻には、

(1) 阿耨多羅三藐三菩提を学するに、聞教し、修行し、証果するに、深なり、遠なり、妙なり。（道元禅師全集上二七七頁）

(2) 山河大地・日月星辰にても修行せしむるに、山河大地・日月星辰かへりてわれらを修行せしむるなり。一時の眼睛にあらず、諸時の活眼なり。眼睛の活眼にである諸時なるがゆゑに、諸仏諸祖をして修行せしむ、聞教せしむ、証果せしむ。（道元禅師全集上二七八頁）

とあり、聞教と修行と証果を述べているのであるが、特に、その三者が同時であることを主張してはいない。ただ、(1)と

(2)の両者を比較するならば、(1)では聞教・修行・証果という順序になっているのであるが、(2)では修行・聞教・証果という順序に変わっている点を指摘することができる。これは順序を問題としていないという推測を可能にすることができるのであろうが、修行と証果の関係については同じ順序であり、道元の考えには修行↓証果という図式が修証観の前提にあると見なければならぬであろう。

このように、道元の意識には、修と証の区別が図式化されていることを認識しておかなければならない。更に、その実例を挙げるならば、『正法眼蔵』「礼拝得髓」の巻には、

日日三時に礼拝し恭敬して、さらに患悩の心を生ぜしむることなかれ。かくのごとくすれば、菩提の道かならずとこあり。われ発心よりこのかた、かくのごとく修行して、今日は阿耨多羅三藐三菩提をえたるなり。（道元禅師全集上二四七頁）

とあり、発心と修行と得菩提の三者の関係が明確に示されていると言うことができる。すなわち、発心↓修行↓得菩提という順序が明確に位置づけられていると言うことができるのである。更に、『正法眼蔵』「発菩提心」の巻には、

菩提心をおこしてのち、三阿僧祇劫、一百大劫修行す。あるいは無量劫おこなひて、ほとけになる。あるいは無量劫おこなひて、衆生をさきにわたして、みづからはつひにほとけにならず、ただし衆生をわたし、衆生を利益するもあり。菩薩の意樂にしたが

ふ。(道元禪師全集上六四六頁)

とあり、発心と修行と成仏の三者の関係が明確に示されている。まず発心することを述べ、その後、三阿僧祇劫、一百大劫、あるいは無量劫を修行することを述べ、そして、その修行の後、成仏することを述べている。この場合、明らかに発心↓修行↓成仏という図式が示されていると言うことができる。すなわち、発心・修行・成仏の間の時間的な推移を明確に看取することができるのである。ここでは明らかに修から証への時間的な展開を主張していると言わざるを得ない。更に、無量劫の修行の後、衆生をさきに度して自らは成仏しない菩薩行について述べているのであるが、この場合も修行の後の衆生の成仏を強調しており、前と同様の修行↓成仏という図式が示されていると言うことができるのである。すなわち、修から証へという展開が示されているのである。

#### 四

このように、道元は修から証へという展開を想定しており、修と証の概念において修から証へという順序を崩していないと言うことができるのである。この場合、発心・修行・菩提・涅槃、あるいは聞教・修行・証果などの順序で展開されおり、修と証の間には明確な展開を看取することができる。ただ、その場合、修と証の関係を同時、ないしは無間隙

『正法眼蔵』における修と証(栗谷)

という状況を設定している箇所もあり、単純に修から証へという展開に終始しているだけではない。

鏡島元隆氏は「本証妙修」を「証上の修」と規定し、「証上の修」をこそ道元禪の特質としているのであるが、実際には、修から証へという展開が想定されており、この観点より見る限り、道元の修証観を「証上の修」という概念に集約しようとするには問題があると言わなければならない。なお、修と証の関係には時間的な展開が明確に示されている場合もあり、修を証上に位置づけるためには困難な状況であると言わなければならない。修を証上に位置づけようとするならば、証から修へという関係を構築しなければならないのであり、修から証へという関係においては、修を証上へ位置づけることなど不可能であると言わざるを得ない。

しかし、道元が「弁道話」において「証上の修」と述べていることは事実であり、なぜ「証上の修」と述べなければならないかなかったのかという問題については充分に考えておかなければならない。更に「本証妙修」という概念が果して道元禪の特質として規定することができるのかという問題についても十分に検討しておかなければならない。これらの問題については、今後の課題とし、別の機会に論じることとしたい。

〈キーワード〉 正法眼蔵、道元、本証妙修、証上の修

(曹洞宗宗学研究所主任)